

小峰城ふもとやま話

第十七話
江戸時代の
流行り病

安政7年（1859）白河藩士たちや町・村で、とある病が流行しました。

当時の白河藩主・阿部家の記録『公余録』9月14日の条には「この節、御家中・在町とも流行病これ有り候に付き、右の病災徐けのため大村鹿島宮へ、明十五日より二夜三日の御祈禱を仰せ付けられ候」この頃、武家や村人、町民の間で流行り病が流行っている。大村の鹿島宮へ、明日15日から3日2晩、災い除けの祈禱をするよう仰せつけられた」と記されており、白河の総鎮守であった鹿嶋神社に祈禱が命じられたことがわかります。

この病は、安政年間、江戸から全国各地に広がった「コレラ」のことだと思われます。

江戸では安政5年（1857）に流行し、この病を「狐狼狸」という妖怪のせいだとする噂が広まり、混乱していました。その他に、流行の前兆として「厄神の王」が現れ、宿を貸した者に白澤（中国の聖獣）の図が描かれた病除けのお札を授けたという噂も広まっていたようです。人々の間でさまざまな情報が飛び交うなか、お札や呪い、神輿・獅子舞の巡行、あるいは正月でもないのに、門松を立て、しめ縄をめぐらし、新しい年を

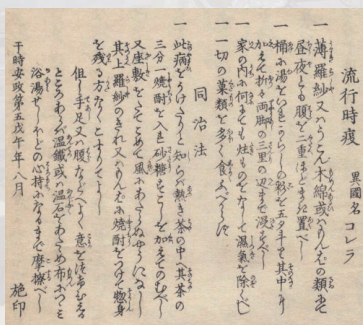
迎えたようにすることで災厄を避けようとした。

仮名垣魯文は、この時の様子を「祇園会と年越とを打交へたる心地せり」疫病を払う夏の祇園祭と年越しが一度にきたようだと記しています（『安政箇労働流行記』1858）。

江戸時代の流行り病への対処は、必ずしも医学に基づいたものではありませんでした。さまざまな対策により、流行り病を乗り越えようとしていました。



「白澤の図」『安政箇労働流行記』より
(国立公文書館蔵)



▲刷り物『安政箇労働流行記』より
(国立公文書館蔵)

渋沢栄一×松平定信 南湖を彩る系譜

第八回
渋沢栄一と養育院
(その二)

松平定信の七分積金は、東京のインフラ整備だけでなく、福祉の分野にも活用されています。日本経済界の指導者であった渋沢栄一は、福祉事業の先駆的存在でもありました。

渋沢が福祉事業に貢献するようになった原点は、母親でした。渋沢の母・えいは、慈悲深い女性で誰に対しても親切で、ハンセン病患者の面倒もみるほど優しい女性でした。

その後成長した渋沢は論語の仁愛思想を学び、福祉への思いをより一層強くしました。やがて幕末に渡仏すると、フランスの近代的な福祉施設や福祉制度に驚嘆します。また、生涯敬愛した定信の福祉政策や考え方にも影響を受けたものと思われます。

戊辰戦争で大きく荒廃した東京は、大幅に人口が減少したばかりでなく、市中に物乞いなどの窮民があふれていました。明治5年（1872）にロシアの皇太子一行が来日することになると、このような状況を見せるのは国の恥辱となってしまうとの政府の思惑から、急きよ市中の窮民をどこかに収容しようとの案が出ました。とりあえず、旧加賀藩邸上屋敷跡に窮民240人が収容されました。こ

れが、後に東洋一の福祉施設と称される「養育院」の始まりでした。

養育院の経費は共有金（七分積金）から支出されています。渋沢は、大蔵省退官後の明治7年に営繕会議所の頭取・共有金取締の嘱託となり、同9年に養育院の事務長を引き受け、その後同12年8月、院長に就任します。



▶東京市養育院板橋本院
新築披露病室にて（大正13年）
(渋沢史料館所蔵)



▲大塚本院の女室『養育院六十年史』より
(東京都立中央図書館所蔵)

(文・中山義秀記念文学館 館長 植村美洋)

お知らせ
ラウンジ
りぼらん
シリーズ
子育て
保健
くらしの
情報館
手話
高齢者サロン
休日当番医・
無料相談ほか
市長の
手控え帖